

# ディルムンを掘る

—バハレーン、ワーディー・アツ＝サイル考古学プロジェクト—

安倍 雅史 東京文化財研究所主任研究員

## Archaeological Research on Dilmun: The Bahrain Wadi al Sail Archaeological Project

ABE, Masashi Senior Researcher, Tokyo National Research Institute for Cultural Properties

### 1. はじめに

紀元前4千年紀、南メソポタミアに世界最古の文明であるメソポタミア文明が誕生した。しかし、南メソポタミアは、年間降水量が200mmにも満たない乾燥地であり、ユーフラテス河とティグリス河が運んだ大量の泥が堆積してできた巨大な沖積平野である。そのため、金属や貴石、良質な木材といった文明生活を営むうえで必要不可欠な資源が存在せず、これらの資源を周辺地域から獲得する必要があった。

ここで活躍したのがディルムンであった。この王国は前2000年～前1700年にかけて、南メソポタミアとオマーン半島、インダス地域を結ぶペルシア湾の海上交易を独占し、繁栄をきわめた。南メソポタミアには、ディルムンの商人の手によって、オマーン半島の銅や

インダス地域の砂金、象牙、紅玉髄、紫檀、黒檀、アフガニスタンのラピスラズリや錫、ディルムンで採れる真珠、鼈甲、珊瑚など、大量の物資が運びこまれていた。いわばメソポタミア文明を物流の面から支え、この文明の生命線を握っていたのがディルムンであった。現在、ペルシア湾に浮かぶバハレーンが、このディルムンに比定されている(図1)。

### 2. バハレーンに残る古墳

ディルムンの繁栄を象徴するのが、バハレーンに残されている無数の古墳である(図2)。バハレーンは、東京23区と神奈川県のカ崎市をあわせた程度の小さな島国である。しかし、この狭い国土に、前2300年から前1700年にかけて、7万5千基もの古墳が築造されたことが知られている。古墳時代の日本列島に造



図1 ディルムンを経由し、南メソポタミアに運び込まれた商品



図2 カルザカン古墳群

られた古墳の総数が15万基といわれているので、この小さな島国に日本列島全土の古墳の半数にあたる数の古墳が造られたことになる。世界でも、これほどまでに古墳が密集する場所は、バハレーン以外にないといわれている。バハレーンに残されている古墳群は、2019年にその価値が認められ、『ディルムンの墳墓群』として一括してユネスコの世界文化遺産に登録されている。

### 3. バハレーン・ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト

ワーディー・アッ=サイルは、バハレーン島内陸台地を南東から北西に流れる全長4kmほどの涸れ川である(図3、4)。近年の開発によって数は減ってしまったものの、本来、この涸れ川の両岸には一千基を超える古墳が存在したと推定されている。

バハレーンには11の古墳群が存在する。しかし、ワーディー・アッ=サイル古墳群を除くと、いずれの古墳群も前2050年～前1700年ごろ、ディルムンが海上交易の独占により最盛期を迎えた時期に形成されたものである。ワーディー・アッ=サイル古墳群のみが一段階古く、前2300年～前2050年に年代付けられている。筆者たちは、2015年より、このディルムン最古の古墳群であるワーディー・アッ=サイル古墳群で発掘調査を実施している。以下、私たちの発掘調査によって得られた諸成果を簡単に紹介したい。

#### 3.1 ディルムンの起源に関して

バハレーンでは、古墳が築かれるより前の時代(前4000年～前2300年)に、人が居住した痕跡はきわめて希薄である。そのため、前2300年前後に、バハレーンに大規模な植民があったと推定されている。新たに入植した人々は、古墳の築造を開始し、ディルム



図3 バハレーンに残されているディルムンの遺跡



図4 ワーディー・アッ=サイル古墳群

ンの礎を築いていった。それでは、この入植者たちは、どこからバハレーンに到来したのか？ 筆者たちは、ワーディー・アッ=サイル古墳群で発掘調査を行い、周辺地域の墓制との比較研究を行ってきた。その結果、ディルムンの起源がメソポタミアの西方に広がる西アジア内陸砂漠北部に暮らしたアモリ系遊牧民にあることがわかってきた。

アモリ人は、ヒツジやヤギを飼育し、西アジア内陸砂漠北部に暮らしていたが、前3千年紀後半になると南メソポタミアへ侵入するようになった。そして、前



図5 ワーディー・アッ=サイル古墳群に残された古墳

2000年を過ぎたころから政治力や軍事力を持って、名だたる都市の支配者層になっていった。前1761年にメソポタミアを統一したバビロンのハンムラビもアモリ人で、先祖をたどると砂漠の天幕に暮らした遊牧民にたどりつく。

筆者たちの調査によって、ディルムン最古の古墳群であるワーディー・アッ=サイル古墳群(図5)と、アモリ人の故地とされる西アジア内陸砂漠北部に残されている古墳群が、きわめて類似していることが明らかとなった。葬制の類似性から、ディルムンの系譜は西アジア内陸砂漠北部に暮らした遊牧民アモリ人に辿れることが明らかとなり、ディルムンもまたアモリ人が打ち立てた王朝である可能性が高まってきた。

現在では、アアリ王墓群の八号墓からディルムン王ヤグリ・イルの名を刻んだ石製容器が発見され、この王の名前もアモリ系の名前であったことから、私たちの説を支持する研究者は多い。

近年、考古学では、骨や歯に含まれるストロンチウムの同位体を分析し、その人物の出生地を推定するストロンチウム同位体分析が盛んに利用されている。筆者たちは、今後、さらなる確証を得るため、ワーディー・アッ=サイル古墳群出土土人骨のストロンチウム同位体分析を進めたいと考えている。

### 3.2. バハレーンへの移住のタイミングに関して

従来、バハレーンへの大規模な植民は、前2200年ごろに起きたと考えられてきた。そして、この植民は、地球規模で寒冷・乾燥化が進んだ4.2kaイベントによって引き起こされたと解釈されてきた。

筆者たちの発掘調査を通じて、ディルムンの古墳からは普遍的に炭化物が採取できることが判明した。古墳からは、人骨とともに煤けたヒツジ／ヤギ骨が出土することが一般的である(図6)。おそらく死者を古墳



図6 石室から出土した人骨と動物骨

に埋葬する際、古墳の前で祝宴が行われ、調理したヒツジ・ヤギの一部が古墳に埋葬されたものと思われる。そして、肉を焼いた小枝の燃えカスが肉や脂身に貼りつき、一緒に古墳の中に混入したと思われる。そのため古墳から回収された炭化物は、古墳の年代を知るうえで非常に良好な資料である。

古墳から回収した炭化物の放射性炭素年代測定を進めた結果、ワーディー・アッ=サイル古墳群の開始年代は、従来いわれていたよりも100年ほど古く、前2300年ごろまで、あるいはそれ以上古くなる可能性が出てきた(図7)。これにより、バハレーンへのアモリ系遊牧民による大規模な植民は、4.2kaイベントとは関係がない可能性が高まってきた。

### 3.3. ディルムンの未成人墓の解明

また、筆者たちは、近年、ディルムンの未成人墓を中心に研究している。図8は、「子持ち古墳」と呼ばれる古墳である。「子持ち古墳」とは、主要な古墳の外壁に小古墳が1つあるいは複数接する古墳である。

従来、小古墳を伴わない単独の古墳あるいは子持ち古墳の主要古墳に16歳以上の大人が埋葬され、子持ち古墳の小古墳には新生児から15歳までの子供が埋葬されていると主張されてきた。しかし、筆者たちの研究によってディルムンの未成人墓はより複雑、多様であり、6歳前後で大きく埋葬方法が変わる可能性があることがわかってきた。

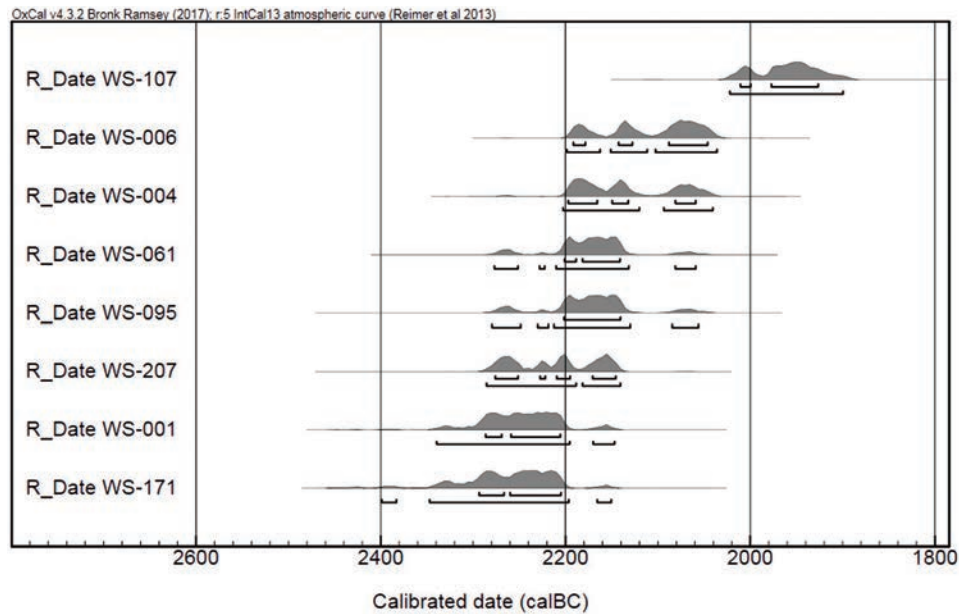


図7 ワーディー・アッ=サイル古墳群から得られた放射性炭素年代測定値



図8 子持ち古墳

#### 4. バハレーンの水中文化遺産に関する予備調査

バハレーンでは、現在、海岸部の埋め立てが急速に進んでいる。バハレーンの専門家は、沈没船といった貴重な水中文化遺産と一緒に埋め立てられているのではないかと危惧している。

そこで、日本を代表する水中考古学者の佐々木蘭貞氏にお願いをし、バハレーンの水中文化遺産に関する予備調査を開始している。いままでに、バハレーンに残る伝統的なダウ船の造船場の調査を行ったほか、

ディルムンの王都とされるカラトゥ・ル=バハレーン遺跡周辺のシュノーケリングによる目視調査また地元の漁師やダイバーへの聞き取り調査を行っている。今後も、水中文化遺産に関する調査を継続していきたい。

#### 5. 社会的活動

研究の成果を地域社会に還元するため、毎年、バハレーン人を対象にした講演会や現場説明会また日本人学校における特別講義などを積極的に実施している。

#### 謝辞

本プロジェクトの実施においては、バハレーン文化古物局のアッザ・アル=ハリーフア王女、ハリーフア・アハメド・アル・ハリーフア王子、ピエール・ロンバル博士またサルマン・アル・マハリ博士から多大なご支援、ご協力を賜っている。この場を借り、感謝を申し上げたい。なお本プロジェクトは、科研費基盤研究(S)「中東部族社会の起源：アラビア半島先原史遊牧文化の包括的研究」(研究代表者：藤井純夫、研究課題／領域番号：19H05592)および科研費基盤研究(B)「ディルムン文明の起源：バハレーン島における古墳群の考古学的調査研究」(研究代表者：後藤健、研究課題番号：26300030)によるものである。

#### 参考文献

- ・ Abe, M. and A. Uesugi 2021 Reconsidering the date of Riffa type

- burial mounds in the Early Dilmun Period: new radiocarbon data from Wadi al-Sail, Bahrain. *Al-Rafidan* 42: 75-85.
- ・Gotoh, T., Saito, K., Abe, M. and A. Uesugi 2020 Excavations at Wadi al-Sail, Bahrain 2015-2019. *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies* 50: 169-186.
  - ・安倍雅史 2017「バハレーンに栄えた古代文明ディルムンの考古学」『文化遺産の世界』<https://www.isan-no-sekai.jp/column/20170426-2>
  - ・安倍雅史 2017「ディルムンの起源と専門化の発展」『Waseda RILAS Journal』5号 482-484頁。
  - ・安倍雅史 2019「真珠、石油、古墳の国 バハレーンへの国際協力事業(I): 古墳群の保存・活用・史跡整備に関するスタディー・ツアー」『文化遺産国際協力コンソーシアム Web Page 文化遺産コラム 文化遺産国際協力のいま』<https://www.jcic-heritage.jp/column/bahrain01/>
  - ・安倍雅史 2019「真珠、石油、古墳の国 バハレーンへの国際協力事業(II): 日本隊による学術調査と新発見」『文化遺産国際協力コンソーシアム Web Page 文化遺産コラム 文化遺産国際協力のいま』<https://www.jcic-heritage.jp/column/bahrain02/>
  - ・安倍雅史・上杉彰紀・西藤清秀・後藤 健 2017「ワーディー・アッ=サイル古墳群から見た古代ディルムンの系譜」『西アジア考古学』18号 1-15頁。
  - ・安倍雅史 2020「バハレーンに栄えたディルムンの考古学—ディルムンをめぐる最新研究動向」『You Tube 日本西アジア考古学チャンネル 西アジア考古学オンライン講義』
  - ・安倍雅史 2021「バハレーン ワーディー・アッ=サイル古墳群—ディルムンの起源を探る」清岡 央(編)『オリエント古代の探求 日本人研究者が行く最前線』135-156頁 中央公論新社。
  - ・安倍雅史 2022『謎の海洋王国ディルムン—メソポタミア文明を支えた交易国家の勃興と崩壊』中公選書。
  - ・安倍雅史・上杉彰紀・岡崎健治・佐々木蘭貞・間舎裕生 2021「ディルムンを掘る—バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト2020」『第28回西アジア発掘調査報告会報告集』85-88頁 日本西アジア考古学会。
  - ・後藤 健 2015『メソポタミアとインダスのあいだ—知られざる海洋の古代文明』筑摩書房。
  - ・後藤 健・西藤清秀・安倍雅史・原田 怜・濱崎一志・吉村和久・岡崎健治・上杉彰紀・杉山拓己・堀岡晴美 2016「古代ディルムン王国の起源を求めて—バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト2015」『第23回西アジア発掘調査報告会報告集』114-120頁 日本西アジア考古学会。
  - ・後藤 健・西藤清秀・安倍雅史・上杉彰紀・濱崎一志・吉村和久・岡崎健治・堀岡晴美・鈴木崇司・成田 竣 2017「古代ディルムン王国の起源を求めて—バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト2016」『第24回西アジア発掘調査報告会報告集』94-99頁 日本西アジア考古学会。
  - ・後藤 健・西藤清秀・安倍雅史・上杉彰紀・原田 怜・岡崎健治・渡部展也・堀岡晴美 2018「古代ディルムン王国の起源を求めて—バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト2017」『第25回西アジア発掘調査報告会報告集』72-76頁 日本西アジア考古学会。
  - ・後藤 健・西藤清秀・安倍雅史・上杉彰紀・岡崎健治・堀岡晴美・原田 怜・間舎裕生・山口莉歩 2019「古代ディルムン王国の起源を求めて—バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト2018」『第26回西アジア発掘調査報告会報告集』71-75頁 日本西アジア考古学会。
  - ・後藤 健・西藤清秀・安倍雅史・上杉彰紀・岡崎健治 2020「古代ディルムン王国の起源を求めて—バハレーン、ワーディー・アッ=サイル考古学プロジェクト2019」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』80-84頁 日本西アジア考古学会。